

建築学部創設にあたって—建築学科の思い出とともに—

内田 青藏*

About the establishment of the Faculty of Architecture -With my personal memories of the Department of Architecture-

Seizo UCHIDA *

2022年4月1日、建築学科は工学部から分離し、建築学部として新たに始動することになりました。所属も工学部から建築学部へと変わり、心情的には母屋を離れ、数寄屋風の離れに移る気分です。ただ、独立するとはいえ、今後も共同研究などを通して工学部とはフランクに行き来する関係を創り上げていきたいと願いつつ、これまでの工学部への感謝を込めて、個人史となる思いを書かせていただきます。

建築学科は1965年、5番目の学科として工学部に増設されました。高度成長期における産業界の要請を背景とした誕生で、建築構造学の権威であった東京工業大学教授の谷口忠先生を中心に組織され、出発しました。大学院が工学部に設置されたのは1967年で、少し遅れて建築にも修士課程ができました。この1967年には、現12号館の総合実験所も開設し、高度な建築構造系の実験施設として建築界でも注目されました。また、1975年には工学部に工学研究所が設置され、教育と研究の場の両輪が揃うことになりました。そして、1990年には建築を含め、博士課程が増設されるなど、今日に至っています。

私は、1975年に7期生として建築学科を卒業しました。4年次には建築史と住宅設計を専門とする森史夫先生のゼミに所属しました。卒業後は大学院に進学しましたが、指導教員である森先生が他大学に転任されてしまい、急遽、白浜研究室に所属を変え、非常勤で来られていた東京工業大学の平井聖先生の指導のもとで修士課程を終えました。そして、その後は東京工業大学大学院博士課程に進み、研究を続けました。

私の大学院時代、森先生の後任が決まらず建築史研究室は空席でしたが、修士修了と同じ1977年に西和夫先生が赴任され、西先生のご尽力もあって研究者として活躍する本学出身の弟子たちが誕生しています。私は、修士修了後は神大と疎遠でしたが、西先生から「近代建築史」の非常勤で呼ばれ、その縁もあって現在に至っているように思います。

2009年に神大に戻ってみると、他大学にも劣らない教育と研究を可能とする充実した環境が整い、また、建築学会などでご活躍の先生方も沢山おられました。しかしながら、創設以来50年を迎ようとする歴史がありながら、建築学科としての独自性や時代に則した教

育への積極的な取り組みなどはあまり感じられず、卒業生としてはいささか気になりました。

神大に戻る前の私は、埼玉大学教育学部に勤めていました。建築から少し離れていたのには訳がありました。当時、建築界では高度成長の弊害から歴史的建造物が次々と壊されるという状況が問題視され、所属する建築学会の活動で、私も歴史的建造物の保存に深く関わっていました。歴史的な建物の価値を人々に伝え、保存を促すという活動でした。ただ、現実社会では経済的問題が立ちばかり、経済性が優先されるだけで歴史的価値や意義は理解されず、保存運動は全敗という状況でした。そんな中で、私は建築の歴史や文化を大切にす価値観を有する人間教育の必要性を強く感じていました。それが、教育学部に奉職していた理由でした。

また、同時に、これからの社会では、新築以上に歴史的建造物の活用が求められる時代になってくることを実感していました。社会は、保存理念の追求を超えて具体的利活用の提案の時代に変化していたのです。新時代に対応するためには、自分の専門とする建築史領域とは別に、既存建築の再利用を様々な角度から追及する新研究領域の構築の必要性を感じていました。そして、この新研究領域は、単なる効率をめざす工学的分野だけではなく、設計やその提案にあたっては、その歴史的建造物の歴史と文化を解き明かし、かつ、経済性や改修に係る法的制限を熟知するなどの文理融合の教育が求められるという思いに至りました。そんな新たな建築学科の構築の思いを、建築学科創設50周年事業を契機に諸先生に伝え、また、先生方の賛同を得て、人々の生活やまちづくりなども視野に入れた新しい建築学科と一緒に模索し始めたのです。そんな動きが、今回ようやく実を結び、建築学部創設を迎えることになったのです。

顧みれば、建築学科創設にあたった谷口先生は、「最近の建築教育は、単なる知識と技能を授けた職人の養成に終わっているように思われる。社会科学と精神科学の一致した広い視野に立って総合的な見解を持つ建築技術者の養成こそ急務だ」と、その建築教育について述べています。ここで謳われている「社会科学と精神科学」の融合こそ、まさしく新たな建築学部が目指す文理融合の教育と研究そのものを指しているように思います。その意味では、この谷口先生の理念こそ、今でも新しく、これからの建築学部の教育理念として受け継ぐべきものであると考えています。そして今後とも、工学部とともに神奈川大学を牽引していく学部として発展していきたいと願っています。

*教授 建築学科
Professor, Dept. of Architecture